

魯迅と厨川白村

楠原俊代

京都大学

一、はじめに

二、一九二四年二五年の特異性

三、魯迅と厨川白村

翻譯の時期

「苦悶の象徴」

「象牙の塔を出て」

兩者の一致

一九二四年二五年に於ける魯迅

まとめ

四、従來の見解に對する批判

五、おわりに

一、はじめに

この小論では、一九二四年及び一九二五年に於ける魯迅

魯迅と厨川白村（楠原）

の文藝活動を通じて、彼にとって書くという事が、一體如何なる意味を持つ行爲であったのかを、明らかにすることが目的である。

一九二四年二五年の兩年、殊に一九二五年は特記されるべき時期である。何故ならば、彼の一生を通じて最も多作な時期の一つであり、しかもそれらの著作が、小説・雜感・翻譯等作品の形式としても最も多様な形を採っているからである。⁽¹⁾それは、魯迅に於ける最も多様な可能性の現われではなかったか。巨大な生命のエネルギーが、様々な形式に於いて放出された時、魯迅の本質とも言うべきものは、不完全な形ではあれ、最もよく現われ出るはずである。

そしてこの問題を考へて行く上で、厨川白村（明治十三年〜大正十二年）の存在を無視することはできない。ところが、魯迅と厨川白村の關わりの大きさについて、これまでほとんど論及されてはいない事を、ここで付言しておきたい。

（詳しくは、本論第四章「従來の見解に對する批判」一〇二頁以下を参照）

二、一九二四年二五年の特異性

まず一九二四年二五年の兩年が、魯迅の一生の内、如何なる位置を占めるのかについて略述しておきたい。時期區分は、王士菁の「魯迅傳」による。

幼年時代：一歳〜十三歳（一八八一〜一八九三）。九月二十五日、浙江省紹興の讀書人の家柄に生まれる。姓は周、名は樹人、字は豫才、幼名樟壽。

従小康人家而墜入困頓：十三歳〜十八歳（一八九三〜一八九八）。周家没落から、一八九八年五月、南京に赴くまで。

走出了「狹的籠」：十八歳〜二十二歳（一八九八〜一九〇二）。南京にて勉學。一九〇二年三月、日本へ留學。

在日本：二十二歳〜二十九歳（一九〇二〜一九〇九）。回到故郷：二十九歳〜三十一歳（一九〇九〜一九一〇）。

一九〇九年八月歸國後、辛亥革命を迎えるまで。

沉默：三十二歳〜三十八歳（一九一〇〜一九一八）。一九二二年革命挫折の後、五月、政府の移轉に伴い北京へ。

呐喊與彷徨^{おほいび}：三十八歳〜四十六歳（一九一八〜一九二六）。一九一八年四月、「狂人日記」を書き、以後ほぼ間斷なく文筆生活を續ける。

厦門——廣州——上海：四十六歳〜四十七歳（一九二六〜一九二七）。

被圍攻：四十七歳〜五十歳（一九二七〜一九三〇）。

眞理・光明・力量：五十歳〜五十六歳（一九三〇〜一九三六、七、十九）。

そして王士菁が「呐喊與彷徨^{おほいび}」（一九一八〜一九二六）と名付ける一時期は、また一九二三年を境界として、二つに區分することができる。（別表参照）

一九二三年は、一つの大きな空白^{ブランク}である。それは「狂人日記」を書いて後、死に至るまで續けられた魯迅の文筆活動の上で、最も寡作の年であり、わずかに「墳」所收の二編、「集外集拾遺」所收の二編、翻譯の「現代日本小説集」等があるばかりである。

一九二三年という空白を境界とする前半、即ち一九一八年から一九二二年に至るまでの五年間には、第一小説集

(別表)

華蓋集	熱風	野草	彷徨	呐喊	
	14			1編	1918
				2	1919
				4	1920
	2			2	1921
	11			5	1922
					1923
	1*	6	4		1924
31		15	7		1925

*一九二四年一月二十八日に書かれたものに、一九二五年九月二十四日付けの訂正が付けられている。

「呐喊」所収の作品全十四編、最初の雜感集「熱風」所収の作品全二十八編中二十七編(但し「題記」は除く)、その他「墳」・「集外集」・「集外集拾遺」等に収められた若干の作品、及びかなりの翻譯がある。

一方、一九二三年を境界とする後半の一九二四年二五年の兩年には、第二小説集「彷徨」に收められた作品全十一編、散文詩集「野草」所収の「題辭」を除く作品全二十三編中二十一編がある。更に一九二五年には極めて多くの雜感文が書かれ、激しい論争が行なわれている。その大部分

魯迅と厨川白村(橋原)

である三十一編は、「華蓋集」に收められている。またこの時期には、厨川白村の「苦悶の象徴」・「象牙の塔を出て」を始めとする翻譯もなされている。

「呐喊」所収の小説全十四編は、一九一八年四月から一九二二年十月までに渡って書かれたのに對し、「彷徨」所収の小説は、二四年に四編、二五年に七編、「野草」所収の作品は、二四年に六編、二五年に十五編も書かれている。雜感については、魯迅自身「華蓋集・題記」に於て、以下の如くに述べている。

「一年の最後の深夜に、この一年間に書いた雜感を整理してみると、『熱風』所収のまる四年間に書いたものよりも多くなった。」(一九二五年十二月三十一日)

但しこの場合まる四年間とはいっても、一九一八年二二年二四年の各年に書かれたものであるから、「熱風」所収の雜感は一九一八年から二四年一月までの、ほぼ六年間に渡って書かれたものであると言える。それよりも、一九二五年に書かれた雜感の方が多いためである。

以上の事實からだけでも、一九二四年二五年の兩年、殊

に一九二五年に於て、魯迅の創作熱が如何に高まっていたかが、一目瞭然である。作品の形式の多様性に關しては、なるほど一九二三年を境にした前半の時期にも、小説・雜感の兩方が書かれ、翻譯もまたなされてはいる。しかしそれらが、二四年二五年の兩年における魯迅の創作熱とは比べるべくもないことは、今ここで明らかにした通りである。

時期區分としては、二四年二五年、それに二六年八月末北京を離れ厦門へ向かうまでを一纏めにすべきである。しかし二六年の一月から八月にかけて書かれたものは、「華蓋集續編」所收の雜感全二十六編中二十四編(但し「小引」は除く)、「朝花夕拾」所收の「小引」・「後記」を除く作品全十編中五編、及び「野草」所收の二編等のみのため省くことにする。何故ならばその著作の大部分を雜感が占め、しかも「朝花夕拾」は回想記であり、また「野草」所收の二編は三・一八事件の後書かれたものであって、もはや所謂小説は書かれていないため、この間の魯迅にその變容の豫兆を感じるからである。即ち魯迅自身『『自選集』自序』⁽³⁾(一九三二年十二月十四日)に於て、以下の如くに述べ

ている。

「北京を逃げ出して、厦門に逃げ込み、(私は)大樓の上で幾編かの『故事新編』と十編の『朝花夕拾』を書いただけであった。前者は神話、傳説及び史實の演義であり、後者は回想記ではない。

そしてその後は、一つも作品はない。『空空如たり』だ。強いて創作と言えるものは、私としては今までにただこの五編があるだけで、またたく間に讀了できるものだ。」

この五編とは、「吶喊」・「彷徨」・「野草」・「故事新編」⁽⁴⁾・「朝花夕拾」⁽⁵⁾のことである。この外に所謂〈創作〉はないと言いつつも、ところが他方魯迅は、一九二六年頃を境界として、それ以後夥しい數量の雜感を書き、極めて精力的な論争を行なっているのである。とすれば、その直前の一九二四年二五年の兩年において、それ以前とは比べるべくもなく多量の作品が書かれ、しかもそれらが小説・散文詩・雜感等といった具合に多様な形式を採り、そのいずれの形式においても多量に書かれた、という事柄には注目すべ

きである。

更に許壽裳編「魯迅先生年譜」⁽⁶⁾には、北京時代の魯迅について、以下の如くに記されている。

「民國元年（一九一二年）：一月一日、南京に臨時政府成立し、教育總長蔡元培に招かれ、教育部部員となる。

五月、海路北京に行き、……、教育部社會教育司第一科科長となる。八月、教育部僉事^{せんじ}となる。

九年（一九二〇）：四十歳。この年秋から北京大學、及び北京高等師範學校の講師を兼任する。

十年（一九二一）十一年（一九二二）は、九年に同じ。」

十二年（一九二三）：この年秋から北京大學、北京師範大學、北京女子高等師範學校及び世界語專門學校の講師を兼任する。

（十三年（一九二四）は、十二年に同じ。）

十四年（一九二五）：この年秋から北京大學、北京女子師範大學、中國大學の講師、黎明中學の教員を兼任する。」

魯迅と厨川白村（補原）

即ち魯迅は、教育部の役人をしつつ、各大學で教えてもいたのである。そしてその頃に於ける自らの創作態度を、以下の如くに述懐している。

「省ける處を、私は決して無理につけ加えなかった。

書けない時にも、私は決して無理に書かなかった。但し

これは、私があゝの頃は別に収入があつて、賣文で生活していなかったためであるから、通例とすることはできない。」（「我怎么做起小説來」一九三三年三月五日）

即ち書けない時には、無理して書く必要が全く無かつたのである。にも拘らず魯迅が、一九二四年二五年の兩年殊に二五年に於て、職業の傍、多大な創作のエネルギーを様々な形式に向けて放出させたという事は、彼自身の内に、今の時期にあつて是非とも書かねばならぬ、といった強い意志が有つたとしか考えられない。それでは、その様な強い意志は一體何に起因するものなのか、或いはまた魯迅にとって書くという事は、一體如何なる意味を持つ行爲であつたのか。この問題を考へて行く上で、厨川白村の存在を無視することができない事には、すでに觸れておいた。魯

迅は厨川白村のかなり大部な著作を、驚くべき短期間の内に購入翻譯出版へと運んだのであるが、それが恰度この時期、即ち一九二四年二五年の兩年に重なるのである。

三、魯迅（一八八一—一九三六）と

厨川白村（一八八〇—一九二三）

翻譯の時期

厨川白村の「苦悶の象徴」が、日本に於て改造社から出版されたのは、一九二四年二月四日である。魯迅はほぼその直後である四月八日に同書を購入。そして同年九月二十二日に翻譯を始め、僅か二十日足らずの十月十日には譯了し、同年十二月に出版している。⁽⁸⁾ また、「苦悶の象徴」譯了後日を置かずして一九二四年十月二十七日には、やはり白村の「象牙の塔を出て」・「十字街頭を往く」⁽⁹⁾ を購入し、一九二五年二月十八日「象牙の塔を出て」を譯了、同年十二月三日に跋を書き出版へと運んでいる。⁽¹⁰⁾ これらが、かなり大部な譯業である事をも考慮に入れるならば、兩書の購入翻譯出版は驚くべき短期間の内になされた、と言わねばならない。

また許廣平からの手紙には、

「授業ボイコット！毎週の『苦悶の象徴』をお伺いする機会もなくなりました！今後いつになったら騒動が解決し、安心して講義をお伺いできるのでしょうか。」（一九二五年六月五日。「兩地書第一集・二七七」）

との記述があることから、魯迅は北京女子師範大學での講義にも、「苦悶の象徴」を使っていたことが知られる。

以上の事實から、厨川白村の著作の翻譯紹介の必要性を、魯迅が如何に強く感じていたかがわかる。

「苦悶の象徴」

「苦悶の象徴」は、第一章「創作論」、第二章「鑑賞論」、そしてこの〈創作論、鑑賞論から當然引き出される系論^{コネクション}〉⁽¹¹⁾ であり、また注疏である⁽¹²⁾ 第三章「文藝の根本問題に関する考察」、及び未定稿のため改造社版厨川白村全集で僅か五頁の第四章「文學の起源」から成っている。同書は要するに、文學とは一體何なのか、即ち創作とは如何なるものなのか、鑑賞とは如何なるものかについて論究せられた、極めて體系的な文學論である。

魯迅はその翻譯本の「引言」に於て、厨川白村を以下の如くに評價している。

「作者はベルグソン一派の哲學に基づいて、突進してやまざる生命の力を人間生活の根本と見なし、またフロイド一派の科學に、生命の力の根底を尋ね、文藝、殊に文學を解釋するのに用いた。しかし、舊説とはまた少し違ふ。ベルグソンは、未來を豫測できないものと見なしたが、作者は、詩人は先んじて知るものと見なした。フロイドは生命の力の根底を性欲に歸したが、作者はその力の突進と飛躍だと言う。それは目下の同じ類の群書の中にあって、殆んど科學者の様な專斷、或いは哲學者の様な玄虚とも異なり、更には一般の文藝評論家の様に煩瑣なものでもない、と言ひ得よう。作者自身に獨創力があるのである。そこで同書は一種の創作となり、文藝に對しても多く獨自の見解と深い理解が見られるのである。」(一九二四年十一月二十二日)

これは白村に對する最大級の賛辭である。科學者の様に獨斷なのではなく、哲學者の様に奥深くて窺うことができな

魯迅と厨川白村(補原)

いでもなく、そしてまた文藝評論家の様に煩瑣なのでもない。魯迅は、同書がもはや一種の創作であるとさえ言う。更に魯迅は同「引言」に於て、厨川白村の人となり、同書の翻譯の意義について、以下の如くに述べている。

「聞けば、彼の性情は極めて熱烈なものであり、かつて『若藥弗瞑眩疾弗瘳』(ちようど藥を飲んでも人が苦しみ悶える程でなければ、病氣は治らないのと同じことだ)と見なしたという。⁽¹³⁾そこで自國の缺陷に對して特に多くの痛切な非難を加えているのであろう。」

「天馬空を行くに似た大精神が無ければ、大藝術の誕生は無い。だが中國の現在の精神は、また何と萎^なえ凋^{しほ}んでいることか。この譯文は拙劣ではあるが、幸い實質が優れているため、讀者は、我慢して二三度繰り返すことができるならば、きっと多くの有意義な箇所を見出すことができるだろう。これが、私が輕率にも翻譯を始めた所以である——勿論分に過ぎた願ひではあるが。」

「天馬空を行くに似た大精神がなければ、大藝術の誕生はない」という魯迅には、白村の「若藥弗瞑眩疾弗瘳」と

いう激しさに相通するものがある。

厨川白村は、今日ではほとんどその名を忘れ去られた人である。だが、中野重治が一九二六年六月「驢馬^{ろま}」に發表した詩「東京帝國大學生⁽¹⁴⁾」には、

『苦悶の象徴』はちよつと讀ませるね』

という一行がある。また吉川幸次郎全集第二十卷「折り折りの人・厨川白村」には、

「上田敏氏の死後、英文學の教授であつた厨川白村⁽¹⁵⁾氏は、いわゆる鞍馬山の圏外にあつたかと想像する。創設以來の老教授たちが、異常な努力の人と、學生たち、ないしは世間から、意識されるのに對し、氏は、より多才の人と目された。當時としては、はなはだ急進的な戀愛至上の説を、となえたことも、先輩教授たちとの間に、ある阻隔を生んでいたかも知れぬ。ジャーナリズムを通じて、もっとも世間に有名なのは、この教授であつた。その『近代文學十講』は、西田幾多郎氏の『善の研究』と相前後して提供されたが、より多くの讀者をもつのは、前者であつた。『象牙の塔を出て』・『苦悶の象徴』、ま

た Haxon Kuriyagawa と署名した『英詩鑑賞』、いずれもベストセラーズであつた。」

と書かれていることから、當時の雰圍氣を窺い知ることができる。

『象牙の塔を出て』

厨川白村は「象牙の塔を出て・卷頭⁽¹⁶⁾に」に於て、〈象牙の塔〉という言葉の意味や出典について、彼の舊著「近代文學十講⁽¹⁷⁾」の内から次の一節を引いて説明に代えている。

「浪漫派文學の一面には、藝術至上主義とも言ふべき傾向があつた。即ちすべての藝術は藝術それ自らの爲に存在するもので、決して他の問題と關係しない。世智辛い苦しい現在の生活に對して、全く超然高蹈の態度をとるべきものだと言へた。醜穢悲惨な此浮世をよそにして別に清く高くまた樂しき『藝術の宮』——詩人テニソンの歌つたやうな the Palace of Art 或は Sainte-Beuve^{サンテ・ベウヴ} がヴィニイを評した時にいつた『象牙の塔』tour d'ivoire のなかに、獨り立籠らうといふ所謂『藝術の爲の藝術』 art for art's sake が其主張の一面であつた。然るに今

や時勢は急變して物質文明の盛んな生存競争の烈しい世の中になつて、人の心には一時一刻と雖も實人生を離れて悠遊するだけの餘裕がなくなつた。人々は現實生活の壓迫を一層痛ましく感ずるに至つた。人生當面の問題が行住坐臥つねにその腦裏を往來して心を悩ましてゐる。

そこで遂に文藝ばかりがいつまでも呑氣な事を言つてゐるわけにも行かず、勢現在生存の問題に密接な關係を持つ事になつた。眼前焦眉の急に迫つて人々を悩ましめてゐる社會上宗教上道德上の問題が直に文藝上に取扱はれる程までに、實生活と藝術とは接近した。」

また魯迅は翻譯本「出了象牙之塔・後記」(一九二五年十月三日)に於て、へ象牙の塔を出てからどうするかについては、その次の論文集「十字街頭を往く・序」に説明が有る(と述べ、その全譯を掲載している。白村の原文は次の通りである。¹⁹⁾

「東せんか西せんか、北せんか南せんか。進んで新しきに就くべきか、退いて古きに安んずべきか。靈の教ふる道に就かんか、肉の求むる所に赴かんか。左顧右眄し

魯迅と厨川白村(橋原)

つつ十字街頭にさまよへるものこそ現代人の心である。『To be or not to be, that is the question.』われ年四十を越えてなほ人生の行路に迷ふ。我が身もまたみづから十字街頭に立つものか。しばらく象牙の塔を出て書窓を去つて、騷擾の巷に立ちて思ふ所を述べよう。すべてこれらの意味を寓して、この漫筆に題するに『十字街頭』の文字を以てした。

人としての生活と藝術と、それは今まで二つの街道であつた。両方が相會して一つの廣場ベカテアに合する點に立つて、我は考へて見る。平素我が親しむ英文學で、シェリイ、バイロンでも、スキンプアンでも、またメレディス、ハアディでも、社會改造の理想をもつた文明批評家であつた。象牙の塔のみには居なかつた。この點が佛文學などとはちがふ。モリスは實に文字通り街頭に出て議論をした。人はいふ。現代の思想界は行詰つて居ると。然し少しも行詰つては居ない。ただ十字街頭に立つてゐるのみだ。道はいくつでもある。」

ここで、魯迅の「北京通信」(一九二五年五月八日、「華蓋

集」所收」を引用しておきたい。

「もしも私に力があれば、私は勿論河南の青年のために盡したいと思う。しかし不幸にして思うばかりで、私にはその力がない。というのは、私自身もまた今岐路に立っているから、——或いは、十字路に立っていると云えば、それでもやや希望があるかも知れないが(因爲我已也正站在岐路上——或者、說得較有希望些：站在十字路口)。岐路に立ってれば、足を踏み出すのがとてもむずかしいが、十字路に立っているのなら、行くべき路は多いわけである。私自身は、何も恐れはしない。」

魯迅は、一九二四年十月二十七日に、「象牙の塔を出て」及び「十字街頭を往く」²⁰を購入し、同年十月三十一日に「十字街頭を往く」所收の「西班牙劇壇の將星」を譯了、一九二五年二月十八日に「象牙の塔を出て」を譯了、同年十二月三日にその「後記」を書いているのであるから、恐らくこの「北京通信」を書いた時、少なくとも「十字街頭を往く・序」には目を通していたはずである。そして、

へ我自己也正站在岐路上、——或者、說得較有希望些：站

在十字路口」と言う魯迅と、へわれ年四十を越えてなほ人生の行路に迷ふ。我が身もまたみづから十字街頭に立つものか」と言う厨川白村のあまりの類似に驚かざるを得ない。時に魯迅もまた四十五歳であった。

兩者の一致

魯迅自身の述懐によつて、彼の文學活動を振り返って見るならば、まず日本留學中、仙臺醫學專門學校を退學し東京へ戻つた(一九〇六年、二十六歳)頃について、彼は次の様に述べている。

「私は、醫學など少しも大切な事ではない、およそ愚弱な國民は、體格がどんなに立派でどんなに丈夫でも、何の意味もない見せしめの材料と觀客にしかねないのだ、何人病死しようが、不幸と考える必要はないのだ、と思つた。従つてわれわれが第一になすべき事は、彼らの精神を改造する事にある。そして精神の改造に役立つものといへば、私は當時當然文藝を推すべきだと考へた。そこで文藝運動を提唱しようと思つた。」(呐喊・自序)

一九二二年十二月三日)

「私にしても小説を『文苑』にかつぎ込もうというよ
うな考えは全くなく、ただその力を利用して、社會を改
良しようと考えたまでであった。」（『我怎么做起小説來』
王士菁の所謂「呐喊與彷徨」期の前半（一九一八—一九二
二）については、次の如く述べている。

「私が小説を書いたのは、一九一八年、『新青年』が
『文學革命』を提唱した時に始まる。（略）

しかし私は當時『文學革命』に對して、實を言うと決
してそれほど熱情を持っていたわけではなかった。辛亥
革命を見、第二革命を見、袁世凱の帝政や、張勳の復辟
を見、いろいろの事を次々に見て來たので、懷疑的にな
り、そして失望し、ひどく落膽していたのである。（略）
しかし私はまた自分の失望をも疑った。というのは私の
見た人々、事件は、極めて限られたものであるからだ。
この考えが私に筆を取る力を與えてくれた。

『絶望の虚妄なることは、まさに希望と相同じい。』

直接『文學革命』に對する熱情でないのに、どうして
筆を取ったのか。考えるに、大部分は熱情を持った人々

魯迅と厨川白村（楠原）

に對する同感のためであった。これらの戰士は、寂寞の
中にいるが、その考えは正しい、少し呐喊の聲をあげて
助勢してやろう、私はそう思った。最初は、ただそれだ
けのためであった。勿論その中には、舊社會の病根を暴
露して、人々の注意を促がし、何とかして治療を加え
ようという希望もいくらか交じらざるを得なかった（自
然、在這中間、也、免來雜些將舊社會的病根暴露出來、催人留
心、設法加以療治的希望。だがこの希望を達成するために
は、先驅者と同一の歩調を取ることが必要であった。そ
こで私は暗黒を少し削り、笑顔を少し作って、作品に若
干の明るさを出すことにした。それが後に一本にまとめ
た『呐喊』で、合計十四編から成っている」（『自選集』
自序）

「勿論、小説を書き出すとなると、どうしても自分の
主張が多少入って來ざるを得ない（自然、做起小説來、總
不免自己有些主見的）。例えば『何のために』小説を書く
かというと、私はやはり十年餘り前の（日本留學中—楠原）
『啓蒙主義』を抱いており、必ず『人生のため』でなけ

ればならず、しかもこの人生を改良せねばならぬと考へていた。私は、小説を『閑書』(ひまつぶしのための書物)

だと稱する以前の言い方を深く憎み、かつ『藝術のための藝術』を『消閑』(ひまつぶし)の新式の別名にすぎないと見なした。

従つて私の材料は、多く病態社會の不幸な人々の中から採つた。病苦を暴露し、治療の注意を促す意味からである。」「(我怎么做起小説來) (傍點 楠原)

即ち、魯迅も固より「象牙の塔」は出ていたのである。

日本留學中初めて文藝運動を提唱して以來、一貫して國民性の改造を意圖し、一方では教育部の役人をし、一九二〇年からは各大學で講師をしつつ、さらに「狂人日記」を書き、「阿Q正傳」を書き、雜感文を書きして來た魯迅にあつては、言うまでもない事である。文學革命に對して、もはや直接の熱情を持ち得ず、「吶喊」所收の一連の小説を書いたのも、大半は熱情を持った人々に對する同感であつたとしても、やはりその中には、どうしても舊社會の病根を暴露して人々の注意を促し、何とか治療を加えようという希望が交じらざるを得なかつたのである。〈藝術の宮〉

或は「象牙の塔」のみには居らず、〈社會改造の理想〉を抱いていたという點において、魯迅と厨川白村は同じである。

従つてまた、〈私は小説を「閑書」だと稱した以前の言い方を深く憎み、そして「藝術のための藝術」を「消閑」の新式の別號にすぎないと見なした〉と言う魯迅と、〈藝術の宮〉或いは「象牙の塔」の中に獨り立籠るといふ所謂「藝術の爲の藝術」に留まらなかつた厨川白村とは、當然藝術至上主義に反對したという點において一致する。

一九二五年の間に書かれた雜感を收録した「華蓋集・題記」には、以下の如くにある。

「またある人は、私にこの様な短評を書かなくてもいいと勧める。その好意には、私は甚だ感激するし、また創作の貴ぶべき事も知らないではない。しかしこの様なものを書きたい時には、恐らくまたこの様なものを書くことになるだろう。もしも藝術の宮殿にそんな面倒な禁令が有るのなら、むしろそんなところには入つて行かない方がよい、と私は考へる。」

魯迅は、〈創作の貴ぶべき事も知らないではない。けれどもこの様な短評即ち雑感を書きたい時には、また書くだろう〉と述べる。要するにまず書きたいという意志がある。それは、へしばらく象牙の塔を出で書窓を去つて、騷擾の巷に立ちて思ふ所を述べようとする白村の態度、即ち言いたい事があるからこそ述べる、という態度と同じである。

そして魯迅は、〈雑感など書かなくてよい、という様な面倒な禁令が藝術の宮殿に有るとしたら、むしろそんな所へは入って行かない方がよい〉と考える。原文〈藝術之宮〉は、厨川白村の「象牙の塔を出て・卷頭に」中の語〈藝術の宮〉の、魯迅譯が、「藝術之宮」であり、时期的にも前者が書かれたのが一九二五年十二月であり、後者の譯了が同年二月であることから、前者は當然後者を踏まえて書かれていると考えられる。魯迅は自分の書いた雑感が、所謂〈藝術〉の範疇に屬するのかどうかについては全く拘泥しないのである。ただ書きたい事があるから書く。そしてその場合、最も適切な表現形式を選ぶのである。「兩地書第一集・三二」に於て、

魯迅と厨川白村（橋原）

「あの詩は、意氣さかんではあるが、しかしこの種の激烈な攻撃には『雑感』など散文形式の方が向きます。

その上言語表現には屈折がなければなりません。さもないと、反感を招きやすいのです。詩歌は比較的永久性の有るものだから、この様な題材にはあまり向きません。」
(一九二五年六月二十八日)

と言うが如くに。一九二五年には、過去のまる四年間に書かれた雑感よりもさらに多くのそれが、確かに魯迅の書きたいという意志のもとに書かれた。そしてまた同じこの年に、所謂〈創作〉も過去のどの一年になされたよりも多くなされているのである。

一九二四年二五年に於ける魯迅

この頃の魯迅、即ち王士菁の所謂〈呐喊與彷徨〉期後半の彼について、魯迅自身の言葉によって振り返って見たい。「その後『新青年』の團體は解散して、あるものは出世し、あるものは隱退し、あるものは前進した。私は同じ陣營内の戦友にもやはりこんな變化があり得るものだという事を、またしても經驗した。その上『作家』とい

う肩書を貰って、依然として砂漠の中を行ったり来たりする羽目に陥った。しかし、もはやとりとめもない刊行物に文章を書く事から逃れ得ず、思いつきを語ると稱している。何か心に感ずるものがあると、短い文章を書いた。誇張して言えば散文詩である。後に一本にまとめ、『野草』と名付けた。少しまとまった材料が手に入ると、やはり短編小説を書いたが、もはや一人ぼっちの戦士となり、陣を敷く事もできなくなつたので、技術は前より少し良くなり、考えもいくらか拘束されなくなつたようだが、戦闘の意気込みはすっかり衰えてしまつた。新しい戦友はどこに在るのか。私は、これは良くない事だと思つた。そこでこの時期の十一編の作品を集めて出版し、これを『彷徨』と名付け、もうこれからはこんな風でないようにと願つた。

『路は漫漫としてそれ修遠なり、
われ將に上下して求め索ねんとす。』⁽²¹⁾

〔『自選集』自序〕

所謂〈創作〉について、魯迅はこの様に述べている。

一方、雑感については、「華蓋集・題記」(一九二五年十二月三十一日)に於て、以下の如くに書いている。

「私は今年、雑感を書き出すと、すぐに二つの大きな障害に出會した。一つは『咬文嚼字』を書いたためであり、一つは『青年必讀書』を書いたためであつた。署名と匿名の豪傑たちの罵倒の手紙が、大きな束にくぐられて、今でも書架の下に突っ込んである。」

「咬文嚼字一」は、一九二五年一月八日に書かれ、「咬文嚼字二」と「青年必讀書」は、一九二五年二月十日に書かれたものである(いずれも「華蓋集」所收)。「咬文嚼字一」では、外國人の姓を翻譯する場合の滑稽さ、例えば、^{トル}斯泰夫人を特に^{ストイ}妥嬾絲苔というふう^{トル}に書くという滑稽、「咬文嚼字二」では、造字による煩わしさ、例えば原素記號を^{セウム}鋳(X)・^{ストロンチウム}鋳(X)・^{スズ}錫(X)・^{セウム}錯(X)・^{ケイ}矽(X)と表記する煩わしさについての鋭い批判がなされ、それらが傳統思想一般への諷刺にまで至っている。また「青年必讀書」では、「付注」として、

「私は中國の書物を讀むと、どうも氣分が沈靜して、

實際の人生から離れて行くように思う。外國の書物——但しインドを除く——を讀むと、大抵人生と接觸して、何かの仕事をやろうという氣になる。

中國の書物にも、社會に入つて行く事を勧める言葉はあるが、大抵は動かぬ屍の樂觀である。外國の書物では、たとい頽廢や厭世であっても、しかし生きた人間の頽廢や厭世である。

私は思う、少ししか——或いは一つも——中國の書物は讀まないで、たくさん外國の書物を讀むのがいいと。」と書いている。

「咬文嚼字一」は、最初「京報副刊」一月十一日に、その「二」は二月十二日に掲載されたものである。同紙には、さらに「咬文嚼字一」に對する讀者からの反論が掲載され、引き續いてそれらに對する魯迅の反論「咬嚼之餘」・「咬嚼未始『乏味』」が掲載された(掲載は、各一月二十二日、二月十日)。一方、二月二十一日付の「京報副刊」に掲載された「青年必讀書」に對する反論に對する魯迅の反論「聊答『……』」・「報『奇哉所謂……』」もまた、引き續いて同紙

魯迅と厨川白村(橋原)

に發表されている(各三月五日、三月八日に發表)。

反響があまりに大きく、自らの主張を貫き通すためには、反對意見に對して、あくまでも自己の見解の正當性を立證しなければならなかつたのであろう。そのためには、論争という形を採つたのも必定のことであつた。魯迅が初めて積極的に論争という形を採用したのは、まさにこの時からであつた。そして論争はこれだけに終らず、さらにはこの年一杯紛糾した女師大事件をめぐつて、陳源等の現代評論派と、魯迅は激烈なる論戦を繰り廣げるに至つたのである。本論九〇頁に於て引用した「華蓋集・題記」には、へしかしこの様なものを書きたい時には、恐らくまたこの様なものを書くことになるだろう。もしも藝術の宮殿にそんな面倒な禁令が有るのなら、むしろそんなところには入つて行かない方がよい、と私は考える」とあつた。魯迅はそれに引き續いて、以下の如くに述べている。

「それよりも砂漠の中に立つて、飛び去る砂や石を眺めながら、樂しければ大いに笑ひ、悲しければ大いに叫び、腹が立てば大いに罵り、そしてたとい砂礫に打ちた

たかれて満身ざらざらになり、頭が破れ血が流れようと
も、いつも自分の凝血を撫で摩って、それをきれいな模
様とも思ったりするのは、中國の文士達にまぎって、シ
ェークスピアのお相伴をしてバターパンを食べるとい
興趣に及ばないものでもなからう。」

〈砂漠の中に立って飛び去る砂や石を眺めながら〉、自
分自身の喜怒哀樂の感情に忠實に、〈樂しければ大いに笑
い、悲しければ大いに叫び、腹が立てば大いに罵り、そし
て己が傷口の凝血さえも撫で摩って美しい模様だと思つた
りもする〉と言う。〈辛亥革命を見、第二革命を見、袁世
凱の帝政や張勳の復辟を見、さらに五四退潮期を経、そし
てもはや一人ぼっちの戦士となり陣を敷くこともできなく
なつた〉魯迅が、あくまでも自分自身であり續けるために
は、畢竟自己を判断の中心に据え、己が傷口から流れ出て
凝固した血液の模様さえも美しいと感ずる程まで、自己に
固執するより他なかつたのである。魯迅のこうした態度は、
「苦悶の象徴」第一章「創作論」に一致する。即ち厨川白
村は同書に於て、以下の如くに述べている。

「文藝は純然たる生命の表現だ。外界の抑壓強制から
全く離れて、絶対自由の心境に立つて個性を表現し得る
唯一の世界である。名利を忘れ奴隸根性を去り、一切の
羈絆制縛から放たれて、そこにはじめて文藝上の創作は
成立するのである。新聞の月評を氣にしたり、原稿料を
計算したりするのは全く違つた心境に入つて、はじめ
て眞の文藝作品は出來あがる。」（全集第二卷一四八頁）
「生命力が抑壓を受けるところに生ずる苦悶懊惱が文
藝の根柢であり、そしてその表現法が廣義の象徴主義で
ある」（二五四頁。魯迅は、「譯《苦悶的象徴》後三日序」⁽²⁴⁾及
び「苦悶的象徴・引言」に於て、まさにこの箇所を、「苦悶の
象徴」の主旨として、提示している。）
「即ち表現とはわれわれが單に外界からの感覺や印象
を他動的に受入れるのではなく、内的生活のうちに入取
れたさういふ印象や經驗を材料にして、新しい創造創作
をすることである。かういふ意味に於てわたくしは上に
述べた絶対創造の生活即ち藝術が、苦悶の表現であるこ
とを言ひたい。」（二六一頁）

「或抽象的な思想や觀念は決して藝術を成さない。藝術の最大要件はその具象性にある。即ち或思想内容が、具象的な人物とか事件とか風景とかいふ生きた儘のものを通して表現せられるとき、換言すれば夢の潜在内容が變装し扮飾して出てくる時と同一の徑路を取るものが藝術である。そしてこの具象性を賦與するものが即ち象徴と呼ばれる。象徴主義とは決して前世紀末に佛蘭西詩壇の一派が標榜した主義ばかりではなく、すべての文藝は古往今來、みなかかる意味に於て象徴主義の表現法を用ゐて居るのだ。」 (一六五頁)

「象徴の外形のやや複雑になつたものが、諷諭、寓話、^{パラソ} 喻話の類で、それらはある眞理、ある教訓をその儘露骨に、動物譚や人物事件に當てはめて表現したものである。しかしその外形が更に一層複雑な事象となつて、強い情緒的效果を具へ刺戟的性質を帯ぶるに及んで、それは立派な文藝上の作品となる。」 (一六六頁)

「内心にあつて燃ゆるが如き欲望が抑壓作用の目附役によつて阻止せられ、そこに生ずる衝突葛藤が人間苦を

なしてゐる。然るにこの欲望の力が目附役の抑壓から免れて絶対の自由を以て表現せられる唯一の場合が夢でありとするならば、吾々の生活のあらゆる他の活動即ち社會生活、政治生活、經濟生活、家族生活等に於て、われわれが常に受ける内的及び外的の強制抑壓から解放せられ、絶対の自由を以て純粹創造をなし得る唯一の生活はこれ即ち藝術である。」 (一六七頁)

「潜在意識の海の底の深いところ^{／＼}に伏在してゐる苦悶、即ち心的傷害が象徴化せられたものでなければ、大藝術ではない。浅い^ち上つらの描寫は、如何にそれが巧妙な技巧に秀でてゐても眞の生命の藝術のやうに人を動かさないのだ。突込んだ描寫とは風俗壞亂の事象などを、事も細かにただ外面的に精寫するの謂ではない。作家が自己の胸奥を深く、またより深く掘り下げて行つて、自己の内容の底の底にある苦悶に達して、そこから藝術を生み出すと云ふ意味である。自己を探ること深ければ深いほど、その作はより高く、より大に、より強くあらねばならぬ。」 (一六八・一六九頁)

魯迅があくまでも自己を判断の中心に据え、自らの喜怒哀樂の感情に忠實に大いに笑い叫び罵りして、さらには己が傷口の凝血を美しいとさえ思ったりする程までに自己に固執したという事は、魯迅文學がへ潜在意識の海の底の深い深いところに伏在している苦悶、即ち心的傷害が象徴化せられたもの、換言するならば、へ自己の胸奥を深く、またより深く掘り下げて行つて、自己の内容の底の底にある苦悶に達して、そしてそこから生み出されて來たものであったという事に他ならない。

魯迅は「華蓋集・題記」に於て、本論九三・九四頁引用部に引き續いて、自らの視野の狭さを反省し、さらには以下の如くに書いている。

「私は早くから中國の青年が立ち上つて、中國の社會、文明に對して、何ら忌憚のない批評を加えることを望んで來た。そこで『莽原週刊』を出版し、發言の場所としたのだが、残念ながら發言するものは甚だ少なかった。

(略)

今、一年の最後の深夜である。もう更けたこの夜も盡

きようとしている。私の生命は、少なくとも一部分の生命は、これらのつまらないものを書く事に費された。そして私の得たものと言えば、私自身の魂の荒涼と粗雑。だが私はこれを氣にかけはしないし、またこれを隠そうとも思わない。それどころか本當はこれらを愛してさえいる。なぜならば、私が轉げながら風砂の中に生活した傷痕であるからだ。凡そ自分もまた風砂の中を轉げながら生活していると思う人には、この意味を分つてもらえるであらう。」

一九二五年最後の夜、魯迅は自らを顧みて斯くの如くに言う。それは同「題記」の始めの部分、即ち

「私は子供の時空を飛ぶ事を夢見たものだが、今日までなお地上にいて、小さな傷を癒すことさえもできない始末である。どうして廣い心になつて、『正人君子』の様

様に公平妥當、中正豁達な議論のできる餘裕があるうか。それはちょうど水に濡れた小さな蜂は、ただ泥土の中を這い回るだけで、ビルディングに住む達人とは敢えて比べるべくもないのと同じである。だが、自らが深い悲し

み、激しい怒りを持っている事は、決してビルディングに住む達人の理解できる所ではない。」

に呼應する。水に濡れた小さな蜂が泥土の中を這い回るかのように、空中を飛ぶこともできず、地上に自分の小さな傷さえも癒す事ができずにいる魯迅ではあっても、その中で決して泣き濡れてはいない。へ自らの深い悲しみ、激しい怒りはビルディングに住む達人の理解できる所ではない」と突っ撥ねる。そこには、強い意志がある。そしてへ自分もまた風砂の中を轉げながら生活していると思う人には、この意味を分ってもらえるであろう」と言う。

魯迅は同伴者を求めているのである。決して指導者となろうとしたのではなかった。それは次に引く彼の文章からも明らかである。

「前進しようとする青年達は、大抵指導者を求めようとしている。しかし私は敢えて言う、彼らは永遠に尋ねあてることができないだろうと。尋ねあてることができない方が、かえって幸運だ。自分で分っている者は、その任に非ずと斷るが、自任している者が果して本當に道

魯迅と厨川白村（橋原）

を知っているだろうか。凡そ自分で道を知っていると任ずる者は、まず「三十」の年を越して、灰色になっており、年寄くさくさになっており、圓滿というだけだ。それを自分では誤って道を知っているのだと思う。もしも本當に道を知っているのであれば、自分でさっさとその目標に向って進むだろう。どうして人の指導者なぞになることがあろうか。」

「或いは、自分のあまり頼りにならない事を知っている者こそ、むしろ頼りになるかもしれない。

青年はどうしてあの金看板をかけている指導者を求める必要があるろう。それよりは友を求めて、一緒に生きる生きられると思われる方向へ歩いた方がよい。君達に溢れているものは生命力だ。深林に出會ったら、伐りひらいて平地にすることができし、荒野に出會ったら、樹木を植えることができる。砂漠に出會ったら、井戸を掘ることができし。荆棘いばらに塞がれた古い道を聞いて何になる。いかがわしい阿呆指導者を求めて何になる。」（「導師」、一九二五年五月十一日。「華蓋集」所收）

(26) 「私自身は、何も恐れはしない。生命は私自身のものだ。従つて自分で行けると思ふ路に向つて、大股に歩いていつて構わない。たとい前方が深淵、荊棘、峽谷、火坑であろうと、自分で責任を持つだけである。だが青年に向つて、何か言うのはむづかしい。もし盲人が盲馬に乗つたように、危険な路に案内することになれば、私は多くの人命を謀殺した罪を負わなければならない。」(「北京通信」一九二五年五月八日)

にもかかわらず、魯迅は同じく「北京通信」に於て、

「私はこう考える。われわれはとにかく青年を牢獄から連れ出さねばならないと。路上の危険は當然あるが、しかしそれは生きる事を求めての偶然の危険であり、避けることはできない。」

とも述べている。そしてこの年即ち一九二五年四月には、「莽原」を主編發刊し(十一月まで「京報副刊」で週刊、翌年一月から獨立し、半月刊として未名社から發刊)、魯迅自らも書くと同時に、青年作家、翻譯家の養成に力を注いでいる。

許壽裳編「魯迅先生年譜」の、一九二四年の記述には、

「この年冬から、『語絲』週刊のために文を作る。」と有り、また一九二五年の記述には、

「この年も『語絲』のために文を作り、また『國民新報』副刊及び雜誌『莽原』を編集する。」

と有る。これらの事實は、以前の彼には見られなかった事である。

結果として魯迅はやはり青年達の指導者であつたと言える。だが魯迅にあつては、〈自己の胸奥〉深くから濫れ出す熱情の爲せる業なのであつて、彼自身はあくまでも自らの共鳴者を求めていたのである。

まとめ

一九二四年二五年の兩年に於ける魯迅については、すでに述べて來た通りである。即ち教育部の役人をし、各大學で講師をしつつ、所謂創作、雜感文による論争、翻譯、「莽原」編集等、彼の一生の内のどの一時期に於けるよりも多様かつ精力的な文藝活動に従事したのであつた。その當時、賣文の必要は全く無かつたにも拘らず、魯迅が以上の様な文藝活動に従事したということは、取りも直さず文

學するということ即ち外界に對する一つの表現活動が、彼の本質に係わる重要な問題であったと考えざるを得ない。それは魯迅の多様な可能性の現われ、換言するならば、外界に對してなされた様々な可能性の試みであったと言えよう。

恰度この時期に、魯迅は厨川白村の「苦悶の象徴」・「象牙の塔を出て」の翻譯を行なっている。かなり大部な著作であるにも拘らず、この兩書の翻譯出版が極めて短期間の内に運ばれたこと、魯迅の白村に對する評價が極めて高いことから、魯迅が厨川白村の著作に對して非常な感銘を得たと考えられる。兩者の著述に見られる文學態度が、重要な點に於て一致している事も、既に指摘した通りである。だが、この兩者の年齢差は僅か一歳しかなく、その邂逅も〈年四十を越え〉ていた。そして魯迅にあつても、またその時點に至るまでの國民性の改造を意圖とする、一貫した營爲の延長上にいたわけであるから、本來資質としてこの兩者に類似する部分があつたのであり、直接の影響關係は無かつたものと考えられる。

魯迅と厨川白村(補原)

しかし、少なくともこの時點に於て魯迅には、厨川白村に對して、同時代の知識人として極めて大きな共鳴が有つたはずである。魯迅も自分でこれだけの文學論が書き得たならば、翻譯なぞはしなかつたであらう。にも拘らず、短期間の内に大部な著作を翻譯出版へと運んだという事は、それまで彼が創作活動を行なうに當たつて、漠然としていて未だ體系をなさなかつたものが、「苦悶の象徴」・「象牙の塔を出て」に於ては言葉になつていたと考えざるを得ない。即ち前者に於ては、〈生命力が抑壓を受けるところに生ずる苦悶懊惱が文藝の根柢〉であるという文學の本質が、後者に於てはへしばらく象牙の塔を出て書窓を去つて、騷擾の巷に立ちて思ふ所を述べよう〉という文學者の態度が。そしてこれらが、魯迅の内により明確な核となつて、彼の文藝活動は一九二四年二五年と、さらに加速度的に激化し、その多様性を増して行くのであつた。

その頃の社會狀況は、魯迅にとつて決して樂天的なものではなかつた。「華蓋集・題記」本論八一頁引用部に續いて、彼はこう言う。

「意見は大體『熱風』のものと同じだが、態度はあれほど卒直ではなくなつたし、文章もとかく曲りくねり、議論もまたとかく小さな事に拘泥して、世の識者の方々に笑われそうなものである。だが他にどうすればいいというのだろうか。私は今年はいにくこれらの小さな事にばかりめぐり合せたのであるし、それで小さな事に拘泥する持ち前の癖ばかりが出て來たのだ。」

〈辛亥革命を見、第二革命を見、袁世凱の帝政や張勳の復辟を見、さらには「新青年」の團體も解散し、もはや一人ぼっちの戦士となり、陣を敷くこともできなくなつた〉當時にあって、「華蓋集」所收の雑感の意見は、やはり「熱風」所收のそれと同じものでしかあり得なかつたのである。〈態度も「熱風」の頃ほど卒直ではなくなり、文章もとかく曲りくねり、議論もまたとかく小さな事に拘泥し〉つつ、彼はあくまでも自分の感受性に固執し、倦まず弛まず書き續けて行つたのである。

魯迅にあっては、また〈苦悶〉そのもの、即ち〈轉げながら風砂の中に生活した傷痕〉こそが、書くといふ行爲を

生み出すエネルギーとなつたのである。

四、從來の見解に對する批判

厨川白村は、かつてその著作がベストセラーであつたにも拘らず、現在その名を殆ど忘れ去られた人である。例えば、「座談會・大正文學史」(柳田泉・勝本清一郎・猪野謙二編、岩波書店)では、彼について以下の如くに語られている。

○「猪野：中國の方では武者小路實篤なんかがよく讀まれたとかいうことがあるが、それに對して壓迫者としての日本の方では、もっぱらヨーロッパの華やかな近代的文化だけが問題だつた。(略)

上原專祿：厨川白村の評價といふものもある程度高かつたということが中國の方ではあるのですけれども、日本のインテリのほうでは中國の動きをほとんど無視している。」(二三頁)

○「猪野：そのなかに厨川白村の『近代文學十講』ですか、あれが時代の要求にびつたりあつて……。」(27)

瀨沼茂樹：あれも大正二年ではないかな。

猪野：ずいぶん版を重ねているでしょう。

柳田：あれは受けたですね。私も學生には。つまり卒業論文の参考書には、あの程度が非常によかったので、非常に讀まれた。それにさっき出た教養の面からもね。

瀨沼：ああいうふうに講義のように世界の近代文學を系統づけて整理した讀物はなかった。」（六八四頁）

○「猪野：しかしいま考えれば、漱石の『文學評論』とは、ちょっと比べものにならないですね、厨川白村と
いうのは。

瀨沼：學問の氣構えがちがうからです。しかし僕は中學時代に讀んだので、中學生にはかえって白村の方がわかりよかった。白村が下というのではなくて、漱石がオリジナルに、文化史的・文學論的であったのに對して、白村の方が今日のように解説的な要素が多かったからです。すね。

勝本：(略)

瀨沼：僕は白村を讀んでいると、文學青年にはずいぶん笑われたものだ。白村なんか讀んでいてはだめだ、文

魯迅と厨川白村(補原)

學修業にはならん、二番煎じじゃないかということです。

しかしたとえば、象徴主義とか、世紀末思想とかいうものを手ほどきしてくれたのは白村です。」（六八五頁）

同書に於て言及されている厨川白村の著作は、僅かに「近代文學十講」のみである。だがこの「近代文學十講」については、白村自身「巻頭」⁽²⁸⁾で、「書物には二種あつて、他人^{ひと}さまのために或事柄を紹介しようと思つて書いた本と、自分のために、言はねば腹ふくめることを外に洩らさうとして出來た本とありませうが、この書のごときは言ふまでもなく前者に屬するもので、どこまでも白墨^{チヨオク}のほひの失せない講義といふ積りで最初から筆をとりました。」と述べている様に、紹介を意圖として書かれたものである。そしてこの意圖は、前掲の引用から察しても、ほぼ完璧に果たされたと言つてよい。一方、後者を意圖して書かれた作品、例えば「象牙の塔を出て」等があるにも拘らず、中國に對する「壓迫者としての日本の方では、もっぱらヨーロッパの華やかな近代的文化だけが問題」であり、白村はその紹介者としてしか評價されなかつた様である。従つて、

それはまた「二番煎じ」ということになってしまっているのである。日本に於ては、厨川白村が「苦悶の象徴」・「象牙の塔を出て」等の内で、一體何を、如何なる態度で言わんと欲したかについて、ほとんど顧慮されなかつたとしか考えられない。

それに對して魯迅は、翻譯本「出了象牙之塔・後記」に於て、以下の如くに論ずる。

「この本、なかでも最も重要な前の三編について見てみるならば、(厨川白村は)確かに戰士として世に現われ、自國の微温・中道・妥協・虚偽・狭量・尊大・保守等の世俗の有様に對して、辛辣な攻撃と假借ない批評を逐一加えている。それは、我々外國人の眼から見ても、また『快刀亂麻を斷つ』が如き爽快であり、稱賛を禁じ得ない。」

要するに魯迅は、所謂「戰士」として、即ち自國の「微温・中道・妥協・虚偽・狭量・尊大・保守等」に對して辛辣な攻撃と假借ない批評を加えた人として、厨川白村を高く評價しているのである。

ところが、例えば増田涉は「魯迅と日本」(魯迅の印象所收。角川選書一三二頁)に於て、以下の如くに述べている。⁽²⁹⁾

「彼はまた武者小路實篤の『或る青年の夢』や厨川白村の『苦悶の象徴』の翻譯をした。ある著作を自國語に翻譯するということは、譯者がその原著に對してもつ何らかの一般的な社會的意味、または特殊の個人的な興味にもとづくものであるに違いないが、魯迅が切りひらき、あるいは打ちたたてた文學(小説および小品隨筆も含めて)を平靜に見てみると、武者小路、厨川を含めて(その一部分を參考としたりある場合には若干の滋養としなかつたとは言えないにしても)當時の日本文學はほとんど特別な、あるいは重要なはたらきかけはしていないようだ。武者小路、厨川の翻譯について考えても文學に盛られた人道主義的な主張とか、文學が單なる慰みものではなく、苦悶を底に持つものだというような、一般的な考え方だとかが、たまたま彼自身の見解に通じるものがあつたという以外には出ていないと思われる。だから、はたらきかけたアトが若干あるとしても、それは周作人の言うよう

に、一部の筆致に漱石の『猫』的なものが認められるという程度で、彼の血肉に食い入るまでの影響はおろか、おそろく日本文學は彼の皮下まで通っているものはないと見られる。なぜなら日本文學を生む精神的基盤というよりむしろ歴史社會的基盤と、魯迅に代表される、そして魯迅を先驅とする中國文學が生まれねばならなかった精神的基盤、というよりむしろ歴史社會的基盤とが、非常にかけ離れたものであつたからということが重要な問題だと思ふ。そのことはまた彼が最も影響をうけたといわれるゴーゴリやアンドレエフや、シェンキヴィッチを生んだ國の、その時代の精神的基盤、というよりむしろ歴史社會的基盤ということを考えてみるならば、いっそうハッキリするのではないかと思ふ。」(傍點 楠原)

だが「文學が單なる慰みものではなく、苦悶を底に持つものだ」という考え方が、たとい「一般的」なものであつたとしても、その様な見解が、眞に「自己の胸奥を深く、またより深く掘り下げて行つて」達した所の「苦悶」から生み出されたものとして、讀者に對して説得力を持つなら

魯迅と厨川白村(楠原)

ば、それはやはり評價されるべきであらう。そして事實魯迅に對して、その様な説得力を持ち得たという事は、既に立證した通りである。従つてまた、「歴史社會的基盤」が、たとい「非常にかけ離れたものであつた」にしても、それが「重要な問題」をなすはずは無いのである。

例えば、「象牙の塔を出て」は、次の一段から始まる。

「なぞもつと寛いで飾り氣なく物が言へないのだらう、氣取つて固くなつたり、論理の輕業をやつたり、有りもしない學問を振り廻はして利巧ぶつたりなぞしないで、もつと素直に、もつと無邪氣に率直に、そしてまた自然の儘に物を言つたつて、何も値打が下るわけではあるまい。」(全集第三卷一一頁)

そして同書には、次の様な記述さえ見られる。

「おゝ田紳の日本よ。田紳の特色は凡てが中途半端で胡魔化して、木に竹を繼いだやうな所にある。」(四四頁)

以上の様な態度で語ろうとした厨川白村をどうして單なるヨーロッパの近代的文化の紹介者としてのみ評價すること

ができようか。

魯迅にとつて、例えば「象牙の塔を出て」とは、次の様な意味があつたのである。

「中國の改革について述べるならば、まず第一には勿論廢物を一掃し、新しい生命の誕生できる機運を作ることである。(略)歴史は過去の事跡であり、國民性は未來に於て改造しなければならぬ。改革者の眼には、過去と現在の物はすべて無に等しい。この本の中には、この様な意味の事が書かれている。」

「著者の指摘する微温・中道・妥協・虚偽・狹量・尊大・保守等の世俗の有様は、まるで中國について言っているのではないかと疑つてもいい位である。(略)著者は既にこれを重病だと見なし、診断の後處方したのであるから、同病の中國に於て、それを借りて少年少女達の參考或いは服用に供することもできよう。恰度キニーネが日本人のマラリアを治せる以上は、中國人のそれも治せるように。」(「出了象牙之塔・後記」)

そして、中國に於て魯迅全集が出版される限り、魯迅譯に

よる厨川白村の著作もまた出版され續けるのである。

五、おわりに

以上、魯迅の一九二四年二五年に於ける文藝活動から、少なくともこの時期までに於て、文學するということ即ち書くという事が、彼にとつて如何なる意味を持つ行爲であつたのかについて論究して來た。今後は、さらにこの小論に於て明らかにした見解に基づいて、「彷徨」を始めとする魯迅の所謂〈創作〉について考えて行きたい。また一九二六年以降の著作の大半を雜感が占めるに至つたのは、結局のところ當時の慌しく苛酷な情勢のもとで餘儀なくせられたものなのか。或いは、一個人としてその様に社會に對峙する事が、やはり理想的な形であつたのか。そして、それは外界に對する表現形式に於ける成熟でもあつたのか。虚構——個人——民族の間には、一體如何なるからくりが存在するのか、等の問題について考えて行きたいと思う。

(一九二五年一月十五日)

注

- (1) 「魯迅年譜」(中川俊編) 参照。
- (2) 「集外集」・「集外集拾遺」にも若干所收。
- (3) 「南腔北調集」所收。
- (4) 「故事新編」所收の作品
補天 一九二二年十一月作
奔月 一九二六年十二月
理水 〇一九三五年十一月
采薇 〇一九三五年十二月
鑄劍 一九二六年 十月
出關 〇一九三五年十二月
非攻 〇一九三四年 八月
起死 〇一九三五年十二月
- (5) 「『自選集』自序」が一九三三年に書かれてから、新たに「故事新編」所收の作品五編が書かれている。「故事新編」については、別の機会に詳細に論じたい。
- (6) 「朝花夕拾」全十編は、一九二六年に書かれた。その中の五編は北京で、他の五編は廈門で書かれたものである。(魯迅は一九二六年八月二十六日北京を發ち、九月四日廈門着。二七年一月十六日廈門を發ち、十八日廣州着。)尙、「小引」は二七年五月一日、「後記」は二七年七月十一日、廣州にて書かれた。
- (6) 魯迅全集第二十卷(人民文學出版社、一九七三年)所收

魯迅と厨川白村(橋原)

- (7) 「南腔北調集」所收。
- (8) 厨川白村の生前、雑誌「改造」(大正十年(一九二二)一月)に「苦悶の象徴」の前半である第一章及び第二章が掲載された。それを明権は同年「學燈」に譯出。白村は大正十二年(一九二三)九月一日關東大震災に遭遇し翌日死亡。その後、後半の第三章第四章を合わせて一九二四年二月四日に出版。魯迅が白村及びその著作に注目したのは、關東大震災の後、「苦悶の象徴」が最初である。全譯本としては、文學研究會叢書の一として出版された豐子愷のもの、魯迅のもの二種類がある。また、仲雲は「苦悶の象徴」第三章を一九二四年十二月「東方雜誌」第二十號に譯出。「關於『苦悶の象徴』」(一九二五年一月九日、「集外集拾遺」所收)による。
- (9) 「象牙の塔を出て」は大正九年(一九二〇)六月二十二日、「十字街頭を往く」は大正十二年十二月十日に、福永書店より出版。この論文に於て使用する厨川白村全集は、昭和四年改造社から出版されたもの(全六卷)である。
- (10) 「魯迅日記」及び「魯迅譯文集・3」(人民文學出版社一九五八年)による。
- (11) 魯迅全集(人民文學出版社 一九七三年)第十三卷の内、各々百七頁、二百二十頁を占める。
- (12) 厨川白村全集第二卷「苦悶の象徴」第三章二〇七頁。
- (13) 阪倉篤太郎は、厨川白村全集第三卷「跋に代へて」に於

て、

「これなどはほんの一些事に過ぎないが、辰夫君（厨川白村の本名）はかういふ調子で、^{*}藥弗瞑眩厥疾弗瘳といふ論法を用ゐたから……」
と書いている。

* 尙書 說命上

(14) 東京帝國大學生

顔の黄色いのがいる

眼鏡がいる

羽織

るばしか

釦の直径が一寸もある外套がいる

乞食のようなものもいる

そして銀座をあるく

酔うと卑しいお國言葉をわざとつかう

學問の蘊奥

人格の陶冶

そして

『苦悶の象徴』はちよつと讀ませるね

ほどだ

そして正門のあたりをぞろぞろと歩いている

ふつとぼおるばかり蹴つているのもいる

(15) 京都帝國大學

(16) 厨川白村全集第三卷六頁（一九二〇年六月）。魯迅は、「題卷端」として譯出。

(17) 明治四十五年三月、大正三年二月、大正四年五月、大日本圖書から出版。厨川白村全集第一卷所收。引用部分は、二〇五頁。

(18) 魯迅の「出了象牙之塔」に於ては、厨川白村の原文のうち、△文藝家と爲政治家との接觸を如何に見るか」と言ふ早稲田文學社の問に答へた△「文學者と政治家」という一編が譯されてゐない。その大意は、△文學も政治も、共に民衆の深い嚴肅な内の生活に根ざした活動△であり、従つて△二者の間にはもつと△眞面目な接觸があるべき△という事なのであるが、魯迅は現在の中國に於て政治家達とこの問題について論じて馬の耳に念佛であり、自らの嫌惡の故にこの一編だけは譯出しなかつたことを、「後記」に於て斷つてゐる。但し改造社版厨川白村全集第三卷のうち、全二百四頁を占める「象牙の塔を出て」中、この一編は僅かに五頁を占めるのみである。

(19) 厨川白村全集第三卷所收。二二一頁。

(20) 「十字街頭を往く」の内、「東西の自然詩觀」・「西班牙劇壇の將星」の二篇は、後に「壁下譯叢」に收められた。

「壁下譯叢」は文藝論文選集で、作者十人、論文二十五篇、一九二九年四月、上海北新書局から出版された。「魯迅譯文集・5」による。

(21) 屈原「離騷」

(22) 「咬文嚼字」に對する讀者からの反論：廖仲潜の「無聊の通信」(一月十五日發表)・「關於『咬文嚼字』」(一月十八日發表)。潜源の「『咬文嚼字』是『濫調』」(一月二十日發表)。

その後、一月二十二日に魯迅は「咬嚼之餘」を發表。

さらに潜源の「咬嚼之乏味」が二月四日に發表され魯迅はそれに對して、「咬嚼未始『乏味』」を二月十日に發表(いずれも「集外集」・「集外集拾遺」所收)。

(23) 「青年必讀書」に對する柯柏森の反論「偏見的經驗」に對して、「聊答……」が書かれ、熊以謙の「奇哉！所謂魯迅先生的話」に對して、「報『奇哉所謂……』」が書かれた(いずれも「集外集拾遺」所收)。

(24) 一九二四年九月二十六日。「魯迅譯文集・3」所收。

(25) 魯迅にとって「雜文」とは、或いはこの様なものであったのかもしれない。

(26) 本論八八頁引用部の續きである。

(27) 原文で前ページ六八三頁に、「柳田：あの頃外國文學がたくさん入ってきたというのは、大正文學の一つの特色ですね。イギリスばかりじゃない、大陸のがうんとう入ってきた。」とある。「近代文學十講」は、その様な時代の要求にぴったりあったのであろう。

(28) 白村全集第一卷、五頁。

魯迅と厨川白村(桶原)

(29) 同様の見解に、片山智行の「魯迅の文學觀と『革命文學』(續)」がある。「中國關係論說資料」14。第二分册(下)(文學)所收：「人文研究」(大阪市立大學)。

(30) 本論九五頁に於て引用。

參考文獻

「魯迅全集」全十卷、卷末注釋

全二十卷

人民文學出版社
一九五八年

人民文學出版社
一九七三年

「魯迅譯文集」全十卷

人民文學出版社
一九五八年

「魯迅日記」上卷

人民文學出版社
一九五九年

「魯迅傳」王士著

香港
文學研究社

「魯迅年譜」中川俊編

大安
一九六六年

「魯迅選集」全十三卷

岩波書店
改造社

「厨川白村全集」全六卷

昭和四年
昭和女子大學

「近代文學研究叢書」第二十卷

昭和三十九年

——厨川白村——

「中野重治全集」第一卷

筑摩書房

「吉川幸次郎全集」第二十卷

筑摩書房

「座談會・大正文學史」

岩波書店

柳田泉・勝本清一郎・猪野謙二編

角川書店

「魯迅の印象」増田涉著

角川書店

「中國關係論說資料」14、第二分册(下)(文學)

「魯迅の文學觀と『革命文學』(續)」片山智行